

学術調査報告書

2008年 4月 14日

(フリガナ)	(フクシマ ノブヒロ)	入学年度	2005年度
申請者名	福嶋 伸洋	学年	博士4年

研究題目	ブラジル近代詩における時間論的主題の研究
主任指導教員	和田 忠彦

(1) 学術調査の目的

申請者の研究対象である、ブラジル・モダニズムに分類される二〇世紀の中頃に活躍した詩人たち（とりわけ、Manuel Bandeira, Carlos Drummond de Andrade, Cecília Meireles, Vinícius de Moraes）は、日本を含めてブラジル国外では、紹介・研究は未だ進んではおらず、本来彼らに値するような注目を集めているとは言いがたいが、ブラジル国内では、世紀の革まった現在でも強い関心の的であり続けている。大学などには研究者が数多くいるし、現在活動している詩人もほとんどが何らかの形で彼らの影響下にあると言える。

このような内外の極端な温度差を考えると、ブラジル近代詩に関する研究を進めていく上で、現地ブラジル（とりわけ、モダニズムの中心地となったりオデジャネイロ）で調査を行うことには、豊富な資料・情報の収集が可能であるという実際的なメリットに加えて、ブラジル近代詩を取り巻いている環境を——往時のものも、アクチュアルなものも——肌で感じ、理解することができるという、他では決して得ることのできない利点がある。

筆者は、博士前期課程に在学していた2003年にリオデジャネイロ連邦大学に聴講生として留学し、詩人カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂの研究を進めていたが、今回の調査では特に、その後の研究の進捗・展開によって研究対象に含まれるようになった詩人たち（マヌエル・バンデイラ、セシリア・メイレーリス、ヴィニシウス・ヂ・モライス）に関する文献や、新たに拓けてきた研究のヴィジョンの中で必要となってきた資料を重点的に収集し、また、上で述べたようなブラジル近代詩への多角的なアプローチを計ることによって、研究課題である時間論的主題に関する研究を発展させてゆくことを目的として

いる。

とりわけ調査の関心としては、以下のようなものが挙げられる。

1、マヌエル・バンデイラ、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂなど近代主義の詩人たちは、20世紀文学に決定的な影響を与え、とりわけそこで繰り広げられている記憶や時間に関する精密な理論は無二のものであるプルーストの小説『失われた時を求めて』に、強い関心を寄せていた。のみならず、1950年代にグローボ社からこの小説のポルトガル語訳の出版が企図されたとき、訳者として選ばれたのはこれらの詩人たちだった。彼らによる『囚われの女』『逃げ去る女』などの翻訳は、ブラジル近代詩へのプルーストの影響を考察する上で不可欠な資料となるはずである。

このような資料の解明から、たとえば、プルーストから出発して独自の記憶論・歴史論を発展させた批評家ヴァルター・ベンヤミンの仕事などとも比較して、筆者がこれまでに進めてきたバンデイラにおける時間論的テーマ（とりわけ、幼年時代や死）や、ドゥルモンにおけるそれ（歴史、記憶、廃墟、亡霊など）の研究に、新たな方向から光を当てることができることが予測される。

2、ブラジルの他の詩人たちと同じように、マヌエル・バンデイラも詩作品の傍らに膨大な量の散文作品、とりわけクロニクルの形を取った作品を多く残している。これらの中ではバンデイラが国内外の詩や文学一般に関する考えを披瀝しているものがあり、また植民地時代の中心的都市オウロプレートOuricuriの荒廃に関するものではその歴史観を垣間見ることができるなど、重要である。とりわけ『ブラジルの地方についてのクロニクル』の新しい版には、文献学者のジュリオ・カスタンニョン・ギマランイスによるバンデイラの翻訳への言及も含んだ論考が併録されており、欠かすことのできない文献である。

このような資料も、1で言及したものと同様、バンデイラに影響を与えている文学者を明らかにする手がかりとなり、また、その詩作品の中で発展させられていった理想郷としての幼年時代、表象の条件としての死などの主題の形成過程をたどることを可能にするだろう。

3、セシリア・メイレーリスもバンデイラと同様に、文学・児童文学に関するもの、教育に関するもの、その他芸術一般に関するものなど、数多くの散文作品を残している。とりわけ注目したいのが、昨年新たに発見された未刊行の原稿（『人間のエピソード』の題の下に出版されている）で、これはクロニクルの体裁を取りながらもきわめて作品性の高い散文である。日常的な事柄、思索的な事柄、芸術に関する事柄など、そのテーマは多岐に

渡っているが、初期の作品ということもあって、のちの簡潔なものとは異なる饒舌な文体が用いられている点に興味深い。詩人としては、初期からほぼ完成された文体を用いて常に完成度の高い作品を残し続けたセシリアの形成過程をたどる上で、きわめて重要な資料となるはずである。

(2) 調査実施地および期間

1、ルイ・バルボース記念館

Casa de Rui Barbosa

Av. São Clemente, Botafogo, Rio de Janeiro

期間：2月8日～13日

2、リオデジャネイロ州立大学

Universidade Federal do Rio de Janeiro

Cidade Universitária, Rio de Janeiro

期間：2月14日～20日

3、リオデジャネイロ国立図書館

Biblioteca Nacional do Rio de Janeiro

Av. Rio Branco, Centro, Rio de Janeiro

期間：2月21日～23日

(3) 学術調査の具体的な実施内容（詳細に記入すること）

1、ルイ・バルボース記念館

19世紀の同名の歴史家に因んで設立されている研究機関である。

当機関の文献学研究者であり、自身詩人であり、またマヌエル・バンデira、ムリーロ・メンデス、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂといったブラジル近代詩人たちに造詣の深い文献学者ジュリオ・カスタニオン・ギマランイス氏のもとを訪れ、筆者の研究の計画について助言を求めた。

また、当機関に併設されている図書室を訪れ、以下の文献のコピーを取った（それほど貴重でない文献であれば、当機関にて有償でコピーを取ることができるシステムが用意さ

れている)。

P. A. LOPEZ, Telê (organizadora), *Manuel Bandeira: verso e reverso*, São Paulo, T. A. Queiroz, 1987. (マヌエル・バンデイラが活動していた当時のジャーナリスティックな批評と、この論集の出版時における複数の新しいバンデイラ論とを併録したもの。バンデイラ研究にとっては必要不可欠な文献である。)

以下の文献はコピーが許可されていなかったが、三分の一以下の分量までなら写真撮影は可能とのことだったので、筆者の研究に有益と思われるページをデジタルカメラで撮影した。

VILLELA CAVALIERI, Ruth, *Cecília Meireles: O ser e o tempo na imagem refletida*, Rio de Janeiro, Achiame, 1984. (セシリア・メイレーリスの作品における水や鏡のイメージと、時や存在の概念との関係についてのモノグラフ。ごく短い論だが、セシリアの詩学の本質をすどく突いている、興味深い作品である。)

BACIU, Stefan, *Manuel Bandeira de corpo inteiro*, Rio de Janeiro, José Olympio, 1966. (バンデイラの作品を多方面から、かつ概括的に捉えている、比較的早い時期に現れたモノグラフである。特に、ヘルダーリン、エリュアール、リルケ、エミリー・ディキンソン、ボルヘスなどの詩人たちの、他国語で書かれた詩を積極的に翻訳し、その影響を多大に受けているバンデイラの一面に注目している点で、他には例の多くない著作であると言える。)

VITUREIRA, Cipriano S., *Manuel Bandeira, Cecília Meireles, Carlos Drummond de Andrade*, Montevideo, A.C.B.E.U., 1952. (ウルグアイの批評家による、マヌエル・バンデイラ、セシリア・メイレーリス、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂの詩の読解。現在の研究ではあまり参照されることのない文献だが、国外でいち早くブラジルの近代詩を概観していると同時に、現在では評価が高く定まっているこれら三人の詩人の抜きん出た重要性を見抜いている点で、ブラジル文学受容史においても注目すべきであると思われる。)

ALMEIDA CARA, Salete de (organização), *Manuel Bandeira: Literatura comentada*, São Paulo, Abril Educação, 1981. (マヌエル・バンデイラについて、その経歴や、詩人が生きた時代の歴史的背景、ビブリオグラフィと年譜、また作者の創造の方法などの実証的なデータを提示している他、その詩の特徴についての考察などを展開している。どちらかといえば入門書的な性格を持った文献だが、バンデイラ研究では無視することのできないものであることに変わりはない。)

2、リオデジャネイロ州立大学

比較文学・ドイツ文学の教授であるヴェラ・リンス氏のもとを訪れ、筆者の研究の計画に付いて助言を求めた。図書室では以下の文献のコピーを取った（持ち出し可能な文献であれば、学内でコピーを取ることができる）。

ARRIGUCCI JR., Davi, *O Cacto e as ruínas*, 2a edição, São Paulo, Duas Cidades, Editora 34, 1997, 2000. (バンデイラの詩「サボテン」におけるサボテンのイメージの地方性を読み解き、また当時のブラジル絵画（タルシリオ・アマラルなど）におけるサボテンの表象（娼婦と結びついたものとしてのサボテン、など）と比較してその社会的意味を明らかにすると同時に、それが喩えられるラオコオンのイメージを美術史的な視点に立って考察している著作。レッシングの『ラオコオン』における芸術ジャンル論と比較してみたい議論である。)

BRAYNER, Sônia (org.), *Fortuna Crítica 1: Carlos Drummond de Andrade*, 2a edição, Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1978. (ブラジル内外の詩人・批評家などによるドゥルモンについてのテキストの中から特に評価の定まっているものを収録している論集。ドゥルモン研究に不可欠な文献と言えるだろう。)

MENDONÇA TELES, Gilberto, *Drummond: A estilística da repetição*, Rio de Janeiro, José Olympio, 1970. (批評家メンドンサ・テリスによる、ドゥルモンの文体における反復の諸様相とその詩学的な意味についての考察。時期によって全く異なる文体を用いたこの詩人の意図を考える上で参考になるはずである。)

GENS, Rosa (organização), Cecília Meireles: *O desenho da vida*, Rio de Janeiro, Setor Cultural de NIELM, 2003. (リオデジャネイロ連邦大学で2003年に開催された同名のイベントで発表された原稿を収録した論集。セシリアの、叙事詩的とも呼べる歴史詩『*Romanceiro da Inconfidência*』における神話と歴史の絡み合いの分析、セシリアの詩における水とナルキッソスと象徴についての分析の他、記憶や死といった主題に関連してセシリア詩のフェミニティについて考察している稿もあり、今後のセシリア研究に書かせない参照項となってゆくだらう。)

3、国立図書館（本館・分館）

複数の所蔵図書を開覧し、必要に応じて簡単にノートを取った（貸し出しには、申請から認定まで一週間以上かかる利用登録が必要とのことで、今回のような短期滞在では文献を借り出すことはできなかった）。特に筆者の研究のテーマに関して有益になりそうなもの

として、以下のものを挙げておく。

CANDIDO, Antonio, ADERALDO CASTELLO, José, *Presença da literatura brasileira - história e antologia, II. Modernismo*, Rio de Janeiro, Editora Bertrand Brasil, 1996. (ブラジル文学批評の重鎮である著者による、近代主義についての歴史的概観。ヨーロッパの〈近代詩〉におよそ半世紀遅れて始まったと言えるブラジルの近代詩の歴史的条件や特異性について考察する上で有益となる文献である。重要な作家・詩人のほとんどについては、作品の引用を含んだ言及があり、後述するヴィウソン・マルチンスの著作と並んで近代主義の理解に資するものである。)

JUREMA, Aderbal (org.), *Semana de estudos sobre Manuel Bandeira*, Brasília, CEUB, 1980. (ブラジリアでこの本の出版年に開催されたバンデイラ学会での複数の報告を収録したもの。とりわけ、バンデイラの詩のリズムに関する論や、バンデイラ詩の主題の地方性に関する研究などが注目に値する。)

4、その他

リオデジャネイロ市内の諸一般書店 (Livraria Travessa, Argumento, Submarino) や、主要な古書店 (Berinjela, Baratos do Ribeiro, Mar da História) を回り、必要な書籍などを購入した。以下にそのリストを示す。

DE SOUZA NEVES, Margarita (org.), *Cecília Meireles: A poética da educação*, Rio de Janeiro, PUC, 2001. (実際に教師として長年教育に携わり、また児童文学についても積極的に発言し続けたセシリア・メイレーリスの、教育者としての思想の広がりに着眼しながら、その詩学との関係についての諸研究を収めている、他に類のない論集である。膨大な量が残されているセシリアの教育に関するクロニクルの読解を多数含んでおり、興味深い。)

HANSEN, João Adolfo, *Solombra ou a sombra que cai sobre o eu*, São Paulo, Hedra, 2005. (自身も詩人である批評家による、セシリア・メイレーリスの最後の詩集である *Solombra* における時間や死などのテーマを扱ったモノグラフ。講演の原稿に基づくごく短いものだが、哲学的な見地に立ったセシリアの詩に関するきわめて鋭い指摘を含んでおり、重要である。)

HOUAISS, Antônio, *Drummond mais seis poetas e um problema*, Rio de Janeiro, Imago, 1975. (ドゥルモンと同時代の詩人たちを扱っている論集で、近代詩人たちがどのような問題意識を共有していたのかを考える手がかりとなるものである。とりわけドゥルモンに関しては、時代区分的に詩学の展開をていねいに追っているものであり、批評家ジョン・グレッドソ

ン、ジョゼ・ギリェルミ・メルキオールらの今では定評のある著作と並んで、この詩人の通史的研究に不可欠なものであるだろう。それぞれの論点の相違を追ってみるのも興味深いはずである。）

LAUS, Lausimar, *O mistério do homem na obra de Drummond*, Rio de Janeiro, Tempo Brasileiro, 1978. (ドゥルモン詩における不可解な存在としての人間のモチーフについてのモノグラフ。とりわけ、「人間性」の解体の主題に注目している点で、ミシェル・フーコーの『言葉と物』やジョルジョ・アガンベンの『開かれ』などの仕事と比較してみたいものである。)

MARTINS, Wilson, *A Idéia modernista*, Rio de Janeiro, Topbooks, 2002. (ブラジル文学界の重鎮と言える批評家、ヴィウソン・マルチンスによる、ブラジル文学の近代主義の諸特徴を論じた著作。特に重要であると見なされる小説家・詩人については個別に、網羅的と言ってよいコメントがあり、ブラジル近代主義の総括的な理解のために役立つはずである。)

PROUST, Marcel, *A Prisioneira*, tradução BANDEIRA, Manuel, SOUSA DE ALENCAR, Lourdes, São Paulo, Globo, 13a edição, 2006.

PROUST, Marcel, *A Fugitiva*, tradução DRUMMOND DE ANDRADE, Carlos, São Paulo, Globo, 11a edição, 2003.

(それぞれ、マヌエル・バンデイラ、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂによるプルーストの小説の翻訳である。プルーストに言及しているそれぞれのテキストと並び、この作家の詩人たちへの影響を推察する重要な手がかりとなるはずである。ドゥルモンはプルーストのアリユージョンを含んだ作品をも残している一方で、この翻訳に関して「経済的な理由だけのためにやった」と言ったとも言われているが、翻訳されたテキストを逐一追ってみることで、そのような発言がどこまで正しいのか、あるいは正しくないのかを判断する手助けになるだろう。)

ROSENBAUM, Yudith, *Manuel Bandeira: Uma poesia da ausência*, São Paulo, Editora da Universidade de São Paulo, 2002. (ラカン派の精神分析学者によるマヌエル・バンデイラの詩の分析。フロイト、ラカンの精神分析の他、エミール・シュタイガーの詩の理論やヴァルター・ベンヤミンの仕事、その他 20 世紀哲学の成果などに依りながら、幼年時代、死、不在、遠さ、聖なるもの、エロティシズムなど、バンデイラ詩における中心的な主題について考察している。これまでの研究史を十分に踏まえながらも、バンデイラ研究の新しい展開を示しているものであると言え、今後外すことのできない参照項となるだろう。)

PY, Fernando, *Bibliografia comentada de Carlos Drummond de Andrade*, Rio de Janeiro, José

Olympio Editora, 1980. (1980年当時までの、ドゥルモンの詩・散文作品の初出情報を網羅的に集めたもので、加えて、新聞などに投稿した際にドゥルモンが用いていた変名・ペンネームの完全なリストも収録している。この詩人のエクリチュールの変遷を時代区分的に追っていくような研究において、最も重要な水先案内となるべきものである。)

5、インタビュー (ジュリオ・カスタニョン・ギマランイス氏)

1950年代にサンパウロのグローボ社から出版された、マルセル・プルーストの長編小説『失われた時を求めて』の、詩人たちが多く参与したポルトガル語訳について、出版社の当時の事情を聞かせてもらい、また、バンデイラやドゥルモンといった詩人たちにとって、プルーストがどのような位置を占めていたのかを判断する材料となる文献を指示していただいた。同時に、ボードレールなどのフランス象徴主義詩が早くからブラジルで読まれ、翻訳されていた事情を教えていただいた。

また、バンデイラ、ドゥルモン、セシリアら、筆者が研究の対象としている近代主義詩人たち相互の交流や評価などについて、雑誌『Festa』など詩人たちの当時の発表媒体などの情報を交えて、聞かせてもらった (バンデイラはセシリアに「即興」という詩を、またドゥルモンにも「カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂ」という詩を捧げており、ドゥルモンもまたバンデイラへのオマージュ作品を書いているし、セシリアについてのクロニクルも残している、など)。

また、フランス文学受容のかたわらで、ドイツ文学や、ヴァルター・ベンヤミンの批評作品がどれだけブラジルで読まれていたか、詩人たちに直接的な影響を与えた可能性はあったかを尋ねたところ、ドイツ詩 (ヘルダーリンやリルケ) は広く読まれていたが、ドイツ語という言葉がフランス語と違ってポルトガル語から隔たったものであるという事情にもよって、ベンヤミンの受容は80年代前後からとのことで、近代主義にはほとんど影響を与えていないはずだとの回答をいただいた。バンデイラ、セシリア、ドゥルモンの詩学にはベンヤミンと比較してみたいくなるような時間・歴史観が多く見出されるが、これは偶然に、というか、それぞれの時代状況の中で各々が独自に達し得たものであるということが、これによって推察される。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

筆者の研究の性格上、今回の調査の成果も多岐に渡るものとなった。簡単に総括すれば、個別詩人研究の著作を数多く入手することができた他、ブラジル近代詩がヨーロッパのそれとどのような点で相同的であり、どのような点で特異であるかを考察する助けとなる資料を多数得ることができた。これによって今後とりわけ、19、20世紀のヨーロッパの文学一般や思想とブラジル近代詩がどんな形で呼応していたか（その影響は一時的なものに留まっているが）を明らかにしてゆくことができるだろう。

現在までの直接・間接の結果として、以下のような研究の予定が立てられた。

1、マヌエル・バンデイラにおける〈幼年時代〉と〈死〉。

プルーストによる〈無意志的記憶〉の発見を一つのマイルストーンとして、ロマン主義以降、〈幼年時代〉は近代文学における中心的な主題となってゆく。またジョルジョ・アガンベンはこの語が持つもう一つの意味「言葉を持たない状態」に注目しつつ、あらゆる語り出しの超越論的な起源としての〈幼年時代〉の性質を分析した。バンデイラ詩においても絶えず追求されているこの主題を、比較文学的に考察してゆく。

また、早くから白血病の恐怖にさらされていたバンデイラは自分が「死にゆくものとして詩を書く」ことを、そのキャリアの最初から強く意識していた。20世紀の批評は文学テクストにおける作者の不在、あるいは作者の死を明らかにしていったが、バンデイラ作品は、ある意味では、このような理論を先取りして体現するものだったと言えるかもしれない。〈葬送〉の主題にも注目しつつ、バンデイラ詩における〈死〉の時間論的様相を検討してゆく。

2、セシリア・メイレーリスにおける〈人魚〉、また〈瞬間〉と〈永遠〉の結びつき。

アンデルセンの童話で世界中に知られている〈人魚〉は、文学史的にはホメーロスの叙事詩に最初に現れているという意味で、文学の歴史そのものと同じ長さの歴史を持つものだが、それは俗謡的な想像力を刺激しただけでなく、マラルメの純粹詩の試みの中にも現れているし、またカフカもその寓話的解釈を試みている。セシリアもまた、その詩においてくり返しこの形象を扱ったが、〈声を失った声〉という主題のもとで、これらの人魚の比較を行ってゆく。

また、ボードレールの詩学の中心に据えられたのは、現代にあっては、移ろいやすいもの、儂いもの、束の間のものでこそ美しく、永遠のものとなる、という考え方だったことを想起しつつ、セシリア詩における〈瞬間〉と〈永遠〉の結びつきを検討し、ボードレー

ルに連なる近代性を明らかにしてゆく。

3、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂにおける〈廃墟〉と〈歴史〉。

ドゥルモンの詩は、荒廃したもの、忘れられたもの、破壊されたものなどに熱心に眼差しを注ぎ、失われた歴史を想像しようとしているが、植民地時代の大都市オウロプレートについてのエッセイでドゥルモン自身が使っている「廃墟の詩学」という言葉に、その姿勢は裏打ちされている。ベンヤミンもまた、廃墟や亡霊、抑圧された者たちの歴史の中にもこそ歴史的救済の可能性を見出そうとする点で、同じ意識を共有していたと言える。同時代を大西洋の両側で別々に生きつつ、それぞれが独自にたどり着いたこのような歴史観を、それぞれのテキストに鑑みつつ検討してゆく。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

ルイ・バルボーザ記念館



国立図書館（分館）

